

3・24総決起「過員」攻撃をうち破る



85.3.14

No.1888

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八(動力車会館)
(鉄電)二九三五(六・公衆)〇四七二(22)七二〇七

60・3「実力決起」で切り拓いた地平を「過員」攻撃で守り高めよう

動労千葉は「60・3」粉碎の闘いに、唯一実力で決起した。「60・3」に協力し、首切り「三本柱」の推進を強制され、組織への恨みつらみ、疑心暗鬼で凝り固まった動労「本部」派の組合員との対局で、わが動労千葉の組合員は路線の正しさに確信を深め、闘いを貫徹した自信に満ち満ちている。この力をもって、3・24三里塚への三たびの五割動員を実現し、「過員」攻撃を打ち破る組織づくりを強化していかうではないか。

死活をかけて決起した「60・3」

われわれは、「60・3」がすさまじい労働強化と要員削減の合理化であることはもちろん、「60・3」以降の「過員対策」をはじめ、十五万人首切り攻撃の突破口と位置付け、労働者の死活をかけて闘おうと呼びかけてきた。

しかし、中曽根の「戦後政治の総決算」をかけた凶暴な攻撃のまえに、国鉄労働運動指導部は後退を深め、「60・3」との対決から逃げまわり、なくす屈辱を開始した。とりわけ動労「本部」革マルは、「国鉄危機は労働者の働き不足」ときめつけ、「国鉄を守るために60・3に協力しよう」と叫び、合理化推進はおろか「60・3」に反対して闘う労働者に妨害を加えてきた。

動労千葉はこうした否定的状況に押しつぶされ提案どおり「60・3」が強行される事態をきつぱりと拒否し、あらゆる戦術を駆使して反撃にたつことを確認し、第一波闘争として2・20(21)非協力・安全確認行動の方針をうちたてた。

敵の急所を鋭く突いた実力決起

労働運動が総屈服状況につき落されるか否かが問われている現状の中で、動労千葉の「60・3」実力決起の方針は電撃的衝撃波となって各方面をゆるがした。

まず、政府・自民党、国鉄当局は国鉄労働運動解体プランが着実に成果をあげ、「闘争」が皆無になりつつある中で、「いまだき闘争などとうていもない」と「嚴重処分」を大上段に構えてきた。とりわけ動労「本部」革マルは、彼等の「情勢分析」からは想像もつかない実力決起の方針に腰もぬかささんばかりに驚き、「やれるものならやってみろ」とケチつけを行ったものの介入することができず、ただ当局の弾圧に望みをたくしたのである。

動労千葉の安全確認行動は、当局、動労「本部」革マル一体となった「闘えない状況づくり」が一定の効を奏している中で、そうであるからこそ「

あつてはならない闘い」として敵の急所を鋭く突き、ストライキに匹敵する効果を発揮したのである。このことは第一波闘争に対する当局のあわてふためき様をみれば確かな手応えとして確認することができるのだ。

一人一人の組合員が重圧をはねのけ闘う意気に燃えて決起

そして何よりも、動労千葉が独自でも「60・3」に実力決起することにより、否定的状況を突破し当局の攻撃に反撃していった、という組合員の決意があつて初めて実現できた闘いなのである。

敵の見境のない攻撃は、「順法闘争」で首切りさえ強行する情勢の中で、一人一人の組合員が決意し、大変な重圧をはねのけて安全確認行動に決起したのだ。

「闘うべきではない」と、労働者の決起を必死で弾圧してまわる動労「本部」革マルに動労千葉の組合員の苦闘などわかるわけがないのだ。

動労千葉は職場集会、個別オルグを何度も積み重ねて意志一致を行い、満を持して闘いに突入した。それは「60・3」そのものへの怒りであると同時に、十五万人首切り「分割・民営化」を通して国鉄労働運動を解体し侵略戦争への道を突き進む中曽根内閣を打倒する闘いの先陣を、動労千葉が切るんだという固い決意に燃えた決起である。

八〇年代後半に通用する労働運動を創りだすとの視点にたった安全確認行動という初の試みにもかかわらず、全組合員が完璧に指令を消化した効果的闘いの実現を背景に、団体交渉でも当局を圧倒し「組合側の主張は理解できる」とまでいわしめる程に追いつめ、「60・3」以降の攻防のうえで、完全に優位な地平を切り拓いた。

第二の「81・3」ともいへば第一波闘争は、「三里塚を基軸とした労働運動」路線ゆえに初めて可能であったのであり、かちとった地平を堅持し「過員対策」をうち破る組織づくりを強化しなければならぬ。その出発点が3・24である。なんととしても三たびの五割動員を実現しよう。